

2014年8月27日 9月19日改訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺2

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

## 1 資料の補足

下記の文献により、以下の記事に気がついたので補足する。

200-iv 『大南寔録正編』第一紀卷 55、19b、嘉隆十六年（1817）六月条

瑪 =（左：王＋右：羔）船泊沱灑、以黄沙圖獻、賞銀二十兩。

200-v 『大南寔録正編』第二紀卷 122、23ab、明命十五年（1834）春三月条

遣監城隊長張福仕與水軍二十餘人乘船往廣義黄沙處、描取圖本及還。

帝問以所產物類。

仕奏言、此處海中沙渚、廣漠無涯。惟有清人往來攻魚捕鳥而已。

因以所採禽鳥魚鱉螺蛤上進。多是奇物、人所罕見者。帝召侍臣觀之。賞在行人等、銀錢有差。

1815年、1816年と二年続けて嘉隆帝がパラセル諸島の調査を行ったことについては、既に本編と補遺で述べたが、さらに 200-iv の記述から、1817年にダナンに停泊したマカオ船からパラセル諸島の地図を購入したことが知られる。

また本編において述べたとおり、1836年にパラセル諸島に毎年調査船を派遣することが決められたが、200-v の記述からそれに先立ち 1834年に小規模な調査が行われ地図が提出されていることが知られる。この記事でさらに興味深いのは、パラセル諸島で漁労や狩猟を行っているのがもっぱら「清人」であるとの報告がなされていることである。『撫辺雜録』や James Horsburgh の記述にあったように海南島の漁民のパラセル諸島での活動について述べたものであろう。本編で見たように中国側では国家・官僚・知識人のパラセル諸島への関心は 19世紀前半でも低いままであったが、海南島の漁民は積極的にパラセル諸島の資源を活用していたようである。他方、ベトナム側では、国家・官僚・知識人のパラセル諸島への〈領土的〉関心が高く、沿海民は主に国家の動員・編成のもとでのみ活動し独自にパラセル諸島に向かうことは少なかったのかもしれない。

Trịnh Khắc Mạnh. 2014. “Nhà nước phong kiến Việt Nam đã quản lý quần đảo Hoàng Sa và

các vùng biển Việt Nam ở biển Đông trong nhiều thế kỷ.” *Nghiên Cứu Lịch Sử* 6(2014).

## 2 『甲午年平南圖』(『洪徳版図』所収、東洋文庫所蔵) 写本

甲午年(1774)に北部の鄭氏政權が南部の阮氏政權を打倒しさらに南のタイソン勢力を牽制するために派遣した遠征軍のリーダーである端郡公裴世達が王朝に提出したベトナム中部・南部(クワンビンからカンボジア国境まで)の地図である。『天南四至路図』よりやや詳しい描写が見られる。以下、この写本がある程度は原型を留めているという前提での議論である。

クワンナムからクワンガイの沿海部には、北から、尖筆山、**bãi cát vàng**(地図上ではチューノムで表記、黄沙の浜)、南針山、「此山多有油」と記された山(島)が描かれている。尖筆山は明らかにクーラオチャムであり、南針山はクワンガイ北端のナムチャム岬(**mũi Nam Châm**)である。「此山多有油」と記された山(島)は**Sa Kỳ**の沿岸に描かれており、リーソン島(**cù lao Ré=đảo Lý Sơn**)と見るのが妥当であろう。これらの島や岬は山ないしは山並みのように曲がりなりにも具象的に描かれている。他方、**bãi cát vàng**は丸のなかにチューノムで**bãi cát vàng**と書いてあるだけである。明らかに**cù lao**や岬とはことなるものとして描かれている。位置としては、ナムチャム岬のすぐ近くの海上に置かれている。海上保安庁の水路誌には、**cù lao Ré**の北北西方約2.5海里にある**cù lao Bờ Bãi**の北西方6.5海里に**Bank de Volta**が存在し、その堆上ではしばしば波浪しているとある(海上保安庁『南シナ海・マラッカ海峡水路誌』2011年3月,pp.47-48)が、この堆**bank**を「黄沙の浜」と呼んだとは考えにくい。

北部から来た人々は、クワンガイの海上に**bãi cát vàng**という特殊な地形の場所があるとの情報を得たのであろうが、その面積や陸地からの距離については正確なイメージが掴めなかったものと推測される。ただ、それがクワンガイに属すると聞いて、海上のすぐ近くのところに描いてしまったのではなかろうか?